



# 地域社会の福祉を追って

リポーター 菅原 馨 (葛原)

今回は、菅原リポーターが社会福祉協議会を通して、地域の福祉について、成田リポーターは、厳しい農業情勢の中にあつて、後継者たる若者たちがどう活動しているのかについて農業近代化セミナーを取材しました。

高度経済成長期

において、社会福祉が大幅に拡充、整備され、個々のさまざまな生活上のニーズにも応えてくれる現代ですが、地域社会における環境をみると、明るさ、ゆとり、安らぎが伴わないという現象がでてきているようです。最近よく「福祉の時代」が言われますが、地域社会における福祉とはどのようなものか、福祉活動の底辺を支える社会福祉協議会を取材し、佐藤事務局長から伺いました。

社協は民間サイドで、行政サイドだけでは手が届かない面、例えば老人、障害者、児童、青少年、低所得者等の福祉や町づくり運動などをカバーし、その事業活動は広範多岐にわたる



佐藤事務局長から取材する菅原リポーター(右)

日本は、二十一世紀には世界に例をみないほどの超高齢化社会を迎えるといわれます。これにどう対処するのか、何か方策があるのかと思ひました。大館市では、六十歳以上の高

ということですが。

私たちは、福祉といえませんが生活保護法、福祉五法を思い浮かべ、その内容も単純に考えてしまうことが多いように思われます。しかし、社会の急速な変化、複雑化によって、福祉の充

実が一層望まれる今、無関心ではいられないと痛感しました。

大館市では、六十歳以上の高

齢者が総人口の約一八%、そのうち昭和六十二年九月現在の要援護老人は、寝たきり二百二十人、一人暮らし八百五十四人となつていくとのこと。将来への布石として当面は、在宅老人福祉のネットワークを構築することや、ボランティアグループを育成することなど、中間施設的なものに重点を置くということ

で、現在ネットワークづくりを進めているそうです。福祉は住民相互の幸せを願うものであり、福祉サービスを受ける本人や家族はもとより、健康状態、経済状態にかかわらず、すべての人々に共通普遍的な問題ではないかと思ひます。地域における福祉というものは、住民一人ひとりが何らかの形で参加し、みんながつくっていくものではないだろうか、それがひいては環境の改善、地域住民の心の活性化へと進んでいくのではないだろうかと思ひます。

## 頑張れ明日の担い手たち

リポーター 成田 弘美 (柄沢)

初夏の風に吹かれる水田は、

緑のジュエタンを敷きつめたようでも心む景色です。しかし、現在の農業が抱える問題は非常に複雑化、多様化しており、その将来を思うと何となく心が重くなつてきます。

こんな状況にあつて、明日の農業を担う若者たちが、将来へ向けてどのような活動をしているのかということは大変興味深く感じます。そこで大館市、比内町、田代町の農業後継者の集まりである「農業近代化セミナー」を取材し、会の概要や活動内容について、会長の小畑純市さん(上四羽出)と農業改良普及所の高橋さんに伺

いました。

会員相互の交流と資質の向上を図ることを目的とする農近ゼミ。現在の会員は十五人ですが、上部団体の県連では八百人(うち女性百四十四人)を数え、さらに全国組織へと広がっているそうです。ちなみに全国組織の会長は大館市から選出されました。

会では、キャンプやスキーなどのレクリエーションを開催し、とにかくだれでも気軽に参加できるように雰囲気づくりに努めているとのこと。また、学習面では「稲作講座」を開催したり、農機具整備の講習会を実施したりしているそうで、昭和

四十年から続いている「プロジェクト学習」では、ここ三年ほど除草剤の効果について研究し、その成果が地域農家に波及していることなどは、後継者グループたる同会の面目躍如といったところでしょう。



右から成田リポーター、小畑さん、高橋さん

かつては会員が五十人以上いて、会員同士のカップルも数組誕生したといいますが、最近では新入会員が減少し、会員確保が大きな問題となっているようです。現在の農業問題を克服していくには、個人的な努力もさることながら、地域的な取り組みが更に重要となるでしょう。それだけに明日を担う若者たちが交流することは、非常に有意義なこととすし、同会が今後農業の諸問題から会員確保という面まで、どういう意識を持って対処していくのか、また全国的組織としてはどうとらえていくのか、大いに期待したいと思ひます。